

# サワの協力と社会生活

— 岩手県江刺市梁川東沢目の地縁組織 —

山 本 質 素

## 目 次

1. はじめに	P. 1
2. 梁川・東沢目の概況	P. 3
3. 東沢目の地域区分	P. 4
(1) 行政区域と上下の区分	
(2) サワとエドウシマケ	
(3) エドウシマケとオボツナ	
(4) オボツナの協力関係	
4. サワ間の協力関係	P. 11
5. ナワナイ仲間の民俗	P. 14
6. おわりに	P. 16

## 1. はじめに

本稿は、昭和51年夏から継続調査中の、北上山中の一集落の民俗資料報告を主な目的とする。この調査は、民俗誌を記述する具体的な方法を確立することを目的として始められたものであるが、4年余を経過して、東沢目という100戸足らずの集落の民俗全般の調査を、私達は未だ完了していない。あらためて調査者自身の力不足と共に、一編の民俗誌を上梓することの困難さを感じている。

今回の調査に先だつ一年余、私達はこれまでに公にされた様々な「民俗誌」について、その目的や形態およびその具体的な方法等を日本民俗学の展開過程と対比しながら検討した<sup>1)</sup>。その結果、地域社会に存続している民俗事象につい

ては、相互に関連して捉える全体的な視点が必要であること、その関連は地域社会の地理的条件や生産構造の変化、あるいは歴史的变化や社会的条件の変化等との関連で吟味しなければならないということ、また民俗事象自身の性格を捉えるために、可能な限り周辺地域との比較が必要であること、などを確認した。そして、調査によって得られた民俗資料は、従来のように大項目、中項目、小項目に沿って分解したまま記述するのではなく、例えば多くの事象の中心となるいくつかの柱あるいは場面を設定し、異なる側面からの資料の検討を経て、民俗事象の現状と変化を描くなど、民俗誌記述の方法を明確にするという意図をもって調査計画したのである。

調査地として、共同調査者がかつて調査を行なったことのある地で、調査報告が公にされていること<sup>2)</sup>、また数人の共同調査に適当な規模を持つ集落ということなどから、北上山中の東沢目という集落を設定した。

東沢目および周辺の諸集落の調査を進める中で、私達は、当地域で「サワ」または「サワメ」とよばれる地域区分の最小単位である居住範域、同じく「エドウシマケ」とよばれる本家分家の集団、「講中」とよばれる重層的な祭祀組織などの上に、東沢目の社会生活、信仰生活が展開していることに注目した。本稿では、このうち地域区分のサワと、サワ間の協力関係の枠組を中心に、その変化を対応させながら、具体的な事象の変化を整理してみようと思う。

北上山系の社会の「サワ」あるいは「サワメ」については、戦前に山口弥一郎らの考察がある。それによれば「さめは澤目即ち扇状地の浅い広い谷を意味するが、現在は部落或は集団の意味に用いており、その本来の意味も既に忘れかけている<sup>3)</sup>。そしてさめとは「吉凶禍福の時助合ったりする単位、或は農事実行組合の単位」であり、「1つの『さめ』に1つの分家群が居住する事も稀にはあるが、多くは他の分家も雑居しており、『えどうし』が血族的分家群を表わすのに対し、『さめ』は地理的に発達した1つの集団を意味する<sup>4)</sup>」と、捉えている。山口は、各々の沢目に孤立居住した個々の「荘宅」（家囲りの田を持つ家宅）から開拓が進み、沢目が組あるいは村の意識を持つ地理的集団となる過程を考察している。

また江刺市、かつての江刺郡は、水沢市に間に西側に位置する胆沢郡とともに、民俗学的な調査だけでなく、多くの社会学的、あるいは人類学的調査研究がなされている。地縁的組織や親族組織等についても、及川宏の著名な諸論考<sup>5)</sup>をはじ

め、末成道男、キース・ブラウン、札幌大学社会学研究室、築島謙三など、多方面にわたる研究があるが、<sup>6)</sup>本稿は報告を主たる目的とするため、これらの報告資料との比較は行わない。ただ、及川宏の増沢村における調査報告および考察については、増沢村が、現在の江刺市の中心である岩谷堂町の東北部の村落であることをはじめ、その考察は東沢目の社会生活を検討する際の有力な指標となったことを付記しておく。

また梁川村時代にまとめられた『郷土教育資料 全』あるいは『梁川村年表』<sup>7)</sup>は、梁川地域の社会や習俗の歴史的変遷などをうかがわせて興味深い。

## 2. 深川・東沢目の概況

岩手県江刺市梁川は、南は同市米里、玉里と、西は同じく広瀬、福岡と、また北および東は和賀郡東和町と接する。東和町は旧南部藩領であり、梁川は旧仙台藩領の北端に位置している。梁川の中心集落である野手崎は17世紀中頃（1644年）に福島県伊達郡梁川から、小梁川氏が移されて館を築いた土地であり、館下（たてした）の地名が残っている。小梁川氏の支配は幕末まで続いた。調査対象とした東沢目はこの旧野手崎村の北端に位置し、西は同村の西沢目が接している。旧野手崎村と、その南に位置する旧栗生沢（くりゅうざわ）村および旧菅生（すごお）村の3つの旧村は明治8年に合併し、小梁川氏の姓をとって梁川村となった。翌9年に江刺郡の岩手県編入とともに岩手県江刺郡梁川村となった。その後昭和30年に江刺町との合併により江刺市梁川となって現在に至る。梁川村当時から行政的には9区に区画されていたが、昭和15年に17の部落に行政区分され、昭和28年に再び9区に編成替えされた。東沢目は第5区の一部と第6区とから成っている。東沢目の行政区分に関する問題点は次節において、その地域区分とともに述べる。

野手崎は東北本線水沢駅と、江刺市岩谷堂を経て、バスで1時間強で結ばれる。また北上市から遠野や陸前高田へ通じる国道107号線に南接する。野手崎の北部にある東沢目の集落は107号線の北側に広がり、昭和25年頃に集落内に大岳温泉が開業して後、岩谷堂からのバス路線が延長された。

北上山系中にある東沢目は、稲作主体の農業集落である。水田は約70町歩ある

が、集落の中央より下に50町歩の田が集中し、近年耕地整理が完了した。一方、上の田にはいまだに大石が残され、水利も溜池に頼っている現状で、耕地整理は着手されていない。反当り収量も、下の田が3.8～4.0石、上の田が1.5～2.0石と約2倍の開きがある。畑では戦時中からタバコが、また15.6年前からホップが換金作物として栽培されている。タバコ、ホップとも上の畑に多い。

東沢目は昭和54年8月現在で男231人、女231人、計462人(図1)、89世帯であり、世帯平均人数は5.19人、一世代家族は6、二世代家族は16、三世代家族は55、四世代家族は12である。現在の夫婦126組について、その通婚圏を見ると、部落内婚61例、部落外からの婚入64例と約半数ずつを占め、部落外婚のうち、3分の1(23例)は旧梁川村内から、また同じく3分の1(21例)が和賀郡東和町からの婚入である。東和町との縁組は古くから盛んに行なわれていた。過疎化も徐々に進んでおり、調査開始後5年の間に2戸の家が他出した息子や娘のもとへ移るなどして無住となり、他に単身世帯と老夫婦のみの世帯が前述のように6戸ある。

梁川内の寺は野手崎の金性寺と菅生の菅生院(かんしょういん)とがあり、いずれも曹洞宗である。梁川内の家々は神葬祭の家を除いて、このどちらかの寺の檀家である。ちなみに東沢目には神葬祭を行なっている家は20軒余ある。なお旧梁川村の村社は野手崎藤渡戸にある松尾神社であり、一般には「野手崎の金比羅様」とよばれている。梁川内から17人の総代が選出されている。また各集落にはそれぞれ部落氏神にあたる神社がある。東沢目には八坂神社があり、東沢目の他に隣接する大幡・四鬲(よつならい)、越田(こえだ)の家々が氏子となっている。

### 3. 東沢目の地域区分

東沢目の家々の協力関係をみる時、本家分家関係の家々から成るエドウシマケや、数多くの講中などとともに、様々な段階での地縁的結合が大きな役割を担っている。まず各段階の地域区分と地縁的結合を整理しよう。

#### (1) 行政区域と上下の区分

東沢目には北から、武道坂、水上沢、柳沢、沢田、猫沢、大内田の六つの字が

あり、集落のほぼ中央に位置する東沢目会館<sup>8)</sup>を境に北側の三つの字を上（カミ）、南側の三つの字を下（シモ）とよぶ（図2）。前述したように東沢目は梁川の九つの行政区のうち第5区の一部と第6区とから成る。5区と6区の境界は字武道坂を二分し、その東北側の家と、字水上沢の全部とが、南東側の山を越えた越田、大幡、四嵐とともに5区を構成している。5区に含まれる東沢目内の家数は37、6区には52戸がある。前述したように東沢目にある八坂神社の氏子は、大幡、四嵐、越田を含めた、5区と6区の家々であり、天王講を構成している。5区と6区は行政区分であるから、総会は当然別々に行なわれる。例えば5区の総会は毎年1月3日に東沢目会館と大幡会館とを1年交代に会場として使用している。6区の総会は毎年東沢目会館を会場とする。また官製の老人クラブや小学校の子供会やPTA、あるいは納税組合の構成などが、この5区と6区の境界にもとづいて設定されている。しかし農事実行組合や、後述するナワナイ仲間、アナナカマ等、日常生活の協力を内容とする仲間は、行政区域を越えて、字区分や、より小さな地域区分であるサワを単位として構成されることが多い。現在の日常生活の協力関係の堆積と一見無関係に定められたかのように見える行政区域も、実はかつて1年間の農作業に重要な位置を占めていた採草地の問題と関わっている。現在は東沢目内に数頭しかない馬もかつてはほとんど全戸に飼われていた。そのカイバ用や堆肥用の草を刈る仕事が、7月から10月にかけての大きな仕事であり、採草地の確保は集落周辺に採草地を持たない東沢目にとって重要な問題であった。上の家は金成山（かなりやま）や大幡の採草地を、下の家は西沢目内の採草地を使用していた。ちなみに現在、行政区分からは東沢目のサワの一つとして数えられる大窪は、西沢目内の赤部という字にあるが、その地域の採草地を必要とした東沢目内の字沢田との結びつきが求められ、日常の交際関係も強くなっている。戦前から戦後にかけて行政区の修正が試みられたが、この大窪の件が解決できずに今日に至っている。5区と6区とがこのように採草地の問題を加味した行政的な区分であるのに対して、上と下の境は日常生活に密接な関係をもった区分であり、東沢目内をより明確に二分している。会館が建てられた位置は、以前から「境石」とよばれる径4～5メートルの大石が道の反対側にあった所で、会館ができる以前からの上と下の境であった。

5区と6区とに区分されながらも、東沢目の人々は、自分達の住む東沢目内を「トコロ」と称し、大幡や西沢目など他の集落を「ワキ」とよんでいることから、

東沢目は一つの居住域をもつ地域社会と捉えることができるだろう。ただし、東沢目の全戸が集まる定期的な会合はない。会館長（かつての公民館長）が主催する不定期な会合、農協主催の実行組合の総会、同じく農協関係の夏期と冬期の講習会などがあるにすぎない。

上を二分して、東沢目全体を三分することがある。これは昭和15年に梁川町全体を9の行政区から17の部落に編成替えした時の部落名によって、水岳、長京、久田とよばれる区分である。すなわち水岳とは武道坂の東北半分（大岳・長沢・西大岳）と水上沢、長京とは上の長京から寺田まで、久田は下の全部である。この区分は、農事実行組合の範囲と重なる。すなわち水岳農事実行組合、長京農事実行組合などである。ただし、久田農事実行組合からは昭和45年ころに下の南半分が蟹沢農事実行組合として分離している。また長京子供会、水岳婦人会など、主として学校関係の区分に適用されることもある。

## (2) サワとエドウシマケ

次に、字の内部をより小さく区分する「サワ」についてみることにしよう（図2）。字武道坂には長沢、大岳、西大岳、長京（長京新田および長京向野を含む）の四つのサワ、字水上沢には間木館（まぎだて）、向川目、中井館、黄和田洞（きわだほら）の四つのサワ、字柳沢には栗谷（くりや）、高坊（こうぼう）、寺田の三つのサワ、字沢田には石合（いしあい）、久田（きゅうでん）、畑中（はたけなか）の三つのサワ、字猫沢には蟹沢（がんだわ）と猫沢の二つのサワ、字大内田には同名の一つのサワがある。西沢目内に含まれるが東沢目との関係がある大窪のサワを合わせて、計18のサワが東沢目に存在する。このサワは、図2からも明らかなように、近隣の家々の居住領域すなわち近隣組であると同時に、オオヤ＝カマドとよばれる本家と分家とからなる家集団すなわち「エドウシマケ」の居住領域でもある。サワとエドウシマケの居住関係を整理したものが表1である。16を数えるエドウシマケのうち、本家と同じサワ内にのみ分家を出しているもの9、他のサワへも展開しているもの7である。また、上のいくつかのエドウシマケでは大本家が他出したり（大岳の今野、長京の阿部、向川目の安部など）、本家が不明となっているもの（実は、いわゆる本家争いをしている向川目の菊池）などがあるが、各エドウシマケの紐帯は強く、エドウシマケの分節化や再編成は

行なわれていない。ただし、本家が他出してしまったエドウシマケでは、基本的には本家が担当していたオボツナ（後述）のベツトウ職を別の家が担当することになるし、また吉凶禍福時に重要な「本家役」を欠くことになるので、別の家に本家役を頼む必要が生じる。本家役はエドウシマケ内の自らの分家（カマド）や兄弟分家（キョウダイカマド）などに頼む場合もあるし、また別の系統の有力な家に頼む場合もある。前者は多くの場合「タガイホンケ」となり、後者は「タノミホンケ」となる。これらの民俗慣行との関係から、エドウシマケの再編成に発展することもあり得るが、この点に関しては、同族団たるエドウシマケの検討とともに、別稿に譲りたい。

分家の分出に伴うエドウシマケの展開の過程と対応して整理すると、サワとエドウシマケの関係は次のような四つに類別できる。すなわち、①一つのサワを一つのエドウシマケが占有する例 — 大岳、西大岳、黄和田洞、中井館、栗谷、久田、蟹沢、猫沢、大内田、大窪 — 、②二つのエドウシマケが一つのサワに混在する例 — 長京、向川目 — ③主体となる一つのエドウシマケが占有していた所に他のサワからの分家が分出してきた例 — 高坊、寺田、石合 — 、④サワを構成するすべての家が他のサワからの分出戸である例 — 長沢、間木館、畑中 — 。

二つのエドウシマケが混在する長京と向川目の例を除くと、サワは一つのエドウシマケの展開する領域であつたことが明らかになる。すなわち、一つのエドウシマケは本家の居住するサワ内に展開し、さらに拡大発展する過程で隣接あるいは近接するサワへ展開していった姿を見ることができる。ここで注意しておかなければならないことは、いくつかのサワに見られる菊池姓、今野姓などの間には、系譜関係が不明であるか、あるいは「全く無い」と意識されていることである。例えば、大岳の今野姓と、久田・畑中等の今野姓の間には系譜関係は全く存在しないといわれ、同じく向川目、高坊、蟹沢、猫沢、大内田に居住する各菊池姓のエドウシマケ間にも、系譜関係は全く意識されていない。西大岳と中井館の菅原姓に関しても同様である。ただ、栗谷の佐々木姓と石合の佐々木姓については、栗谷のオオヤであるF54が、石合のオオヤであるF66のワカレであるともいわれている。しかしF54は10代以上を経過した家であり、石合の佐々木姓との間にエドウシマケとしてのつきあい、例えば吉凶禍福時のよびよばれや、手伝いあいなどは全くない。

一つのサワを一つのエドウシマケが有占する例では、サワのつきあいと、エドウシマケのつきあいとは完全に一致する。一方、本家の居住するサワ以外へ分出した家の側から見れば、③の場合も、④の場合も、エドウシマケの家々との関係が途切れることはない。従って、④の長沢や間木館へ分出したB 1、B 2、B 3、やD 25、D 26、などは、サワのつきあいが表面化するまでもなく、エドウシマケのつきあいに包含される。また③の場合の、久田から石合へ分出したA 69、A 71、A 72、石合から畑中へ分出したF 73、あるいは中井館から高坊へ分出したC 47などでは、エドウシマケのつきあいと、サワのつきあいが二重に存在することになる。しかし後述するように、サワのつきあいの大部分はサワ内で完結しているのではなく、ナワナイ仲間やアナナカマなど、いくつかの隣接するサワ間にみられる協力関係の単位として働いているので、多くの場合、サワのつきあいがエドウシマケのつきあいを阻害するものではない。

### (3) エドウシマケとオボツナ

東沢目のエドウシマケは2戸から12戸の範囲で構成され、それぞれオボツナとよばれる同族神を祀っている(表1)。ここでは各オボツナの来歴、祭神、祭祀の内容等については述べない。<sup>9)</sup>ただ各オボツナは単なる小祠ではなく、それぞれ社殿を有し、ある場合には神楽を奉納する神楽殿を伴うほどの規模であり、社殿等の屋根替えや修復、奉納する神楽等に関する費用が、小さなエドウシマケでは相当な負担になり、その結果、後述するような、いくつかのオボツナ間、すなわちエドウシマケ間に相互協力が生ずる環境にあるということを指摘しておきたい。

さて、17を数えるエドウシマケのうち、独自のオボツナを持たないのは、西大岳の菅原姓、大窪の今野姓、大内田の菊池姓だけである。このうち菅原姓は長京の二つの阿部姓のエドウシマケがオボツナとしている葉山神社の、また今野姓は栗谷の佐々木姓のオボツナである月山神社の、それぞれオボツナ祭祀に参加している。大内田の菊池姓のみがオボツナを持たないことになる。一つのエドウシマケは原則として一つのオボツナを有するが、ただ久田の今野姓だけは、大本家であるA 64がベツトウをつとめる駒形神社と、A 60がベツトウをつとめ、その分家であるA 59および寺田の菊池姓とともに祀る白山神社とがある。一つのエドウシマケがオボツナ祭祀に関して二分されているのはこの例のみである。この結果、



東沢目内に13を数えるオボツナのうち、二つのエドウシマケが参加しているもの2（月山神社、白山神社）、三つのエドウシマケが参加するもの1（葉山神社）となり、それ以外の10のオボツナはすべて、一つのエドウシマケが一つのオボツナを有する形態となる。本家の居住するサワ以外へ分出した分家も、本家のエドウシマケつまり自らも所属するエドウシマケのオボツナの氏子である。例えば、猫沢に分出しているD81は、本家であるD57とともに月山神社の氏子であり、高坊に分出しているC47も本家C43とともに雷神社をオボツナとしている。現在居住するサワ内に優越するエドウシマケが祀るオボツナの氏子となることはないのが基本的な形である。東沢目のオボツナは、同族祭祀の対象であり、地縁的なサワの地域神たる性格を有してはいないといえる。

しかし、A69の例がやや異なる様相を示している。A69は久田のA62から石合へ分出後4世代を経ているが、石合の佐々木姓のオボツナである火石森稲荷への関与は、佐々木姓の側からも、講中の一員と考えられている。A69自身はエドウシマケのオボツナである駒形神社と、現在居住するサワの火石森稲荷の二つともにオボツナであると考えている。

氏子の義務を果たしているか、あるいは近隣の家からの単なる寄付であるかを判断するために、各神社の社殿あるいは神楽殿側面に掲げられている、屋根替え時や修復時の「氏子帳」あるいは「お手伝い帳」が有効な資料となる。昭和32年の火石森稲荷の「本堂屋根替ニ付御手伝……披露」には、A69は、今野姓の一員としてその名が掲げられている。従ってこの時点ではA69は未だ火石森神社の氏子とは考えられていないことになる。しかし、その「お手伝い」の内容は、氏子のそれと同じである。すなわち久田や畑中や石合に居住する他の今野姓がすべて金100円のお手伝いであるのに対して、A69は「萱（かや）二丸、おがら壺、人足七分」となっている。これは当神社の氏子と比較すると、量的には及ばないものの、質的には、現金だけのお手伝いに比べて、氏子のそれに近づいている。A69は分家後ただちに火石森稲荷の氏子となったのではなく、徐々に佐々木姓との親交を深め、ついに講中の一員と考えられるようになったものと思われる。

オボツナについては、そのベツトウ職に関する個々の事情などからも、それぞれのエドウシマケの展開等についての解明も可能となると思われるが、ここではこれ以上立ち入らないことにする。

#### (4) オボツナの協力関係

東沢目内のいくつかのエドウシマケ間には、オボツナ祭祀に関する特別な相互協力が見られる。元々、複数のエドウシマケが参加している葉山神社と月山神社、それに他のオボツナとの協力関係をもっていない大岳神社の例を別にすると、次のようなオボツナに関する協力の四つのグループがあげられる。上には、高坊菊池姓の熊野神社と中井館菅原姓の雷神社および寺田菊池姓と一部今野姓の白山神社のグループ、向川目菊池姓の滝沢稲荷と向川目安部姓の熊野神社および黄和田洞菊池姓の熊野神社のグループ、下には久田・畑中今野姓の駒形神社と石合佐々木姓の火石森稲荷のグループ、蟹沢菊池姓の山の神と猫沢菊池姓の稲荷および大内田菊池の1軒を加えたグループ、である。この協力関係は、あたかもサワ間の協力関係の如くに捉えることができる。例えば、久田・畑中の今野姓と石合の佐々木姓は、エドウシマケの展開の過程で、互いのサワに分家を出しているが、オボツナ祭祀に関する協力関係でみると、久田、石合、畑中の三つのサワ内のすべての家が協力する形となる。この間の事情は、向川目・間木館・黄和田洞の場合も、高坊・中井館・寺田の場合もほぼ同様である。前述したような経済的条件も加わり、最小単位のオボツナ間の協力はエドウシマケが混在する居住範囲内で行なわれる。複数のオボツナにあたかも地域神的性格が付加されているかのようである。しかし、他の地方のように複数の神社を合祀したりすることがなかったのは、オボツナ自身の同族神的性格の強さ、ひいてはそれらを担う各エドウシマケの独立性の強さが、東沢目では際立っていたからではないかと考えられる。

オボツナ間の協力とは、具体的には、オボツナ毎に異なっている祭日を共にし、毎年交代で一つのオボツナの祭日に全戸が集まり、共同で祭をすることである。一例をあげよう。向川目・間木館・黄和田洞の場合、祭日は向川目の熊野が、旧8月29日、滝沢稲荷が旧9月9日、黄和田洞の熊野が旧9月28日とそれぞれ異なっているが、三つのサワに居住する16戸の家で一つの講中を構成し、1年交代に家並順にマツリヤド(宿前ともいう)をつとめる。宿にあたった家の本来のオボツナの祭日に合わせて祭礼を行なうことになる。戦前までは宿で神楽を奉納した後、16人が宿に集まって昼食をとった。神楽は長京神楽などを頼むが、神楽への礼や食事の費用はすべて宿の家の負担であった。戦後この秋まつりはしばらく休んでいたが、昭和45年ころ、宿の家の負担を軽くするために、向川目の熊野神社

に16人が集まり御神酒をあげるようにした。祭日には各自のオボツナの掃除をし、宿で神楽を奉納することにかわりはない。

高坊・寺田・中井館の場合も、昭和50年から会場を東沢目会館とし、神楽への礼や食費はすべて会費制となった。その他の内容は前記の例とほぼ同じである。

石合・久田・畑中の場合、昭和40年代末まで、前記の例と同じような協力関係があったが、それ以後は行なわれていない。ここでは20年ほど前からそれまで各エドウシマケや親類間におこなわれていた正月礼を共同で行なうようになり、やはり宿元を順につとめ、会費制になっているが、これは現在も続いている。

大内田・蟹沢・猫沢では、秋の祭日に、栗生沢神楽や、広瀬、倉沢、南部などの芝居を頼んで奉納していたが、戦時中にこれらを奉納することはなくなって、今日に至っている。しかし、現在も、秋の共同祭祀は三部落の交代でまつりの宿をつとめている。

いずれの場合も、明治30年代生れの話者が覚えているころにはすでに行なわれていたもので、オボツナ間の協力のはじまりや理由を追求することは聞き書き調査によるだけでは難しくなっている。

社殿や神楽殿の屋根替えや修復などについても、オボツナ祭祀を共同にする隣接のサワ間、エドウシマケ間に協力関係が見られる。それは、「お手伝い」と称するもので、昭和30年ころまでは寄付金を「手伝い」とするか、またはカヤや縄を提供して実際に一人一日弱の手伝いをするのであったが、以後は屋根替え・修復・改築時にもすべて金による「お手伝い」に統一されている。

以上のように、本来は同族祭祀の対象であるオボツナまで、共同で祭祀しようとする信仰の一体感の背景には、経済的な面からの必要性のほかにも、日常的な交流による一体感、親近感が必要であると思われる。次にそのような日常生活の中の協力関係を見てみよう。

#### 4. サワ間の協力関係

山手伝い…サワを単位としたサワ同士の協力関係として、まず「山人足」「山手伝い」とよばれる葬送時の墓穴掘りがある。例えば下の猫沢、蟹沢、大内田の三つのサワの間では、死者がでると、他の二つのサワから山人足が出て墓穴を掘

る。相互に、手伝い（ヤマカセギとも称する）を担当する家々の範囲をハカナカマ、あるいはアナナカマとよぶ。このようなハカナカマは、他に、久田、石合、畑中に一つ、高坊、寺田、中井館に一つ、向川目、黄和田洞、間木館に一つ、長沢、西大岳、長京に一つ、大岳に一つ、栗谷に一つと、計七つあり、これは前節でみたオボツナに関する協力を行なう範囲と一致する。栗谷では6軒の家を二分して、互いのヤマカセギを担当する。大窪は、久田のグループに加わっている。

山手伝いをした者は、墓地から帰ると、親類以外の人達とともに「オヤマオリ」として念仏をあげ、夕飯を食べて帰宅する。

屋根替え…屋根の葺き替えには、親類とともにナワナイ仲間と称する範囲の家から手伝いが来る。ナワナイ仲間は長沢、大岳、西大岳、長京に一つ、栗谷、高坊、中井館、寺田に一つ、久田、石合、畑中に一つ、大内田、蟹沢、猫沢に一つ、計五つの仲間がある。これも大岳が長京のグループと、栗谷が高坊のグループと合流しているが、前記のオボツナの協力や、山手伝いの協力関係とはほぼ一致する範囲に構成されている。

カヤヤネは25年位はもつので、20年から30年に1度葺き替える。屋根替えは春の彼岸すぎに行なわれる。屋根替えに必要なものは、カヤ、縄、オサエ、ヒルゴメなどである。カヤは「手伝いガヤ」と称して、ナワナイ仲間から10丸（とまる）あるいは2～3丸、またカヤ無尽に加入していれば無尽の仲間から10丸ずつ提供される。縄も家で用意しておいた分だけで足りないので、ナワナイ仲間から10タガ（トータガ）、オケ仲間から3タガ（100ひろ）などの提供を受ける。オサエとは押木のことでやはりナワナイ仲間や無尽の仲間から30本位ずつ手伝ってもらう。ヒルゴメは手伝いの人に食わせる昼飯用の米のことで、他にシバテとよばれるオカズ類も含めて、主に親類の家が持参する。1人あたり4斗から1石を持ってくるので10俵以上集まることもあった。6間と9間位の大きなオモヤを葺く時はカヤ300丸が必要であり、手伝いの人手も、親類から2人ずつ、ナワナイ仲間から毎日1人ずつ、1日は2人でくるが、それだけでは足りないのでオケガシラに連絡し、葺き大工の手配を頼む。葺き大工には手間賃を払うが、親類や仲間はお互い様なので食事を出すだけである。毎日30～50人の人手で1週間位かかる。小さな小屋なら仲間だけで3.4日で済むこともある。例えばマキ小屋などは、葺き終るまでに3日、のべ50人位の手伝いで済む。屋根葺きが終ると「フキゴモリ

の祝い」をし、手伝ってくれた人達をすべて招く。

現在、東沢目ではカヤ屋根（“くずや”とよぶ）の家が3軒を残すだけとなっている。昭和32年にE28の家が東沢目ではじめてトタン屋根に替えて以後カヤ屋根への葺き替えは徐々に減り、昭和39年にD48がカヤ屋根の葺き替えを行なったのを最後に、以後の屋根替えはすべてトタン屋根か瓦屋根（現在2軒）となった。

サナブリ…田植の後の、サナブリの日には、朝仕事として「マッコ（馬）のツメ切り」が行なわれた。上と下とに一カ所ずつの「マサスバ（馬刺場）」があり、そこで馬のツメを切ったり、アゴや足から血を抜いたりした。上には最盛時で、100頭位の馬がいたといわれる。マサスバでの作業が終ると、上は三つのマヤナカマ、下は二つのマヤナカマに分かれて、「サナブリ祝い」を行なう。下の二つのマヤナカマにはオオマヤ、コマヤの名がある。前者は石合、久田、畑中、大窪のそれであり、後者は大内田、蟹沢、猫沢のそれである。マヤナカマの構成は大窪が久田のグループに加わることを除いて、ナワナイ仲間の構成と全く同じく、五つのグループに分かれる。サナブリの祝いは最近では会館で行なわれるようになったが、それでもマヤナカマの宿は順番につとめ、例えばかつては実際にマサス場で馬の頭にあてた、太さ10cm、長さ30cm位の「ウママクラ」を麦ワラで作り、仲間の数だけ用意する。このウママクラはサナブリの時に仲間に配る。これを家の門口などにくくりつけておくと無病息災といわれる。

現在、東沢目内には数頭の馬が飼われているだけであり、マッコのツメ切りなどの行事も全く行なわれていない。またサナブリの翌日に行なっていた「キャードーコサエ」（街道の補修）も行なわれなくなった。この街道はカイバ用や堆肥用に刈った草を馬につけて、採草地から運ぶ山道である。馬がいなくなり、草刈りも必要性が薄くなった今日では馬の通り道の補修も無用のものとなっている。

田植のユイ…田植の手伝い、ユイに関しては、昭和40年代まで、エドウシマケやサワ内の4～7軒位の家が仲間となっていたが、昭和50年ころから田植機械が導入されて、ユイも少なくなってきた。田の草取りなどは親類やサワ内の家同士で現在も手伝いあっている。

以上、共同労働や手伝いに関して、サワの間の協力関係を中心にみてきたが、これらが主として堆積している複数のサワの範囲として、前述した五つのグループを抽出することができる。この五つのグループは、また雷神講中や阿弥陀講中

の構成範囲とはほぼ重複している。もちろん東沢目には、他にも山の神講や駒形講、金華山講、古峰ヶ原講、百万遍講など、様々な信仰対象を持った講が大小様々な範囲に組織されている。しかしこれらの信仰的な講の構成に、先にあげたサワやエドウシマケあるいはそれらが基礎となって構成されるサワの五つのグループなどが、重要な組織原理として作用していることを指摘できる。サワの間の協力はつまるところエドウシマケの協力であり、それは日常的な協力関係とともに、オボツナ祭祀の共同を代表例とした信仰面での協力関係として現われるのである。

## 5. ナワナイ仲間の民俗

サワ間の協力、エドウシマケ間の協力が以上のような形をとる時、それは具体的な民俗事象に対してどのような影響を与えるだろうか。ここでは現在も維持されているナワナイ仲間と、全く行なわれなくなったナワナイに関する事象をとりあげてみよう。

前述したように東沢目には五つのナワナイ仲間がある。仲間は、春の屋根替えの時に用いる「アシトナ（足留縄）」や、秋の稲を干す「イネバセ」のヒモなどに使う縄をなうために、晩秋から冬の農閑期に、あるいは遅くとも春の彼岸前までに、仲間の家を宿にして順番にまわり、なった縄を宿においてくる。材料のワラはその宿にあたっている家で用意しておく。ワラをしごいてツチボで打ってやわらかくして、縄をなえる状態にしておくのである。夕食後、仲間の家から223才から30才位までの男達が集まって来て、宿のニワ（土間）で、用意されたお茶などを飲みながら縄をなう。30ひろを1わといい、これを3わ、つまり約100ひろを、遊びながらでも2時間位のうちになうのが一人前の作業の目安とされていた。その日のナワナイが終ると茶をのんで話をして帰る。来年屋根替えをしようと思う人は、この機会に仲間に話をしておく。仲間の家をひとまわりするとその年のナワナイは終了するが、年によってはふたまわりすることもある。また彼岸前に集中してナワナイをする時は、午後、夕方、夜というように1日3軒の宿をまわることもあった。仕事を終えたあとで酒を飲むような時は、ツチボのツチガミにも酒を供えた。

その年のナワナイがすべて終ると、彼岸前に「ナワナイのカサコシ」という祝

いを行なう。毎年のカサコシの宿は、あらかじめ家並み順とか、くじびき等で仲間毎に定められている。実際のナワナイには欠席しても、カサコシには参加するとさえいわれる。宿の順が書かれたフダがあり、ナワナイ仲間の構成員は仲間ごとに16人とか、24人とか常に一定である。宿では酒や砂糖、あんなどを用意し、各自は酒米としてウルコメ（ウルチ米）5合のほか、モチ米5合を宿に持ちより、ひとりあたり1個の「五合餅」を食べる。五合餅はサナブリ祝いの時などにも作られる。祝い事には欠かせないものであった。つきたての五合餅を二つ折りにしてあんや砂糖などを入れたり、スミソをつけて食べる。

カサコシの祝いは、156年前にやめてしまった大内田・蟹沢・猫沢の仲間以外では現在も行なわれているが、会場を東沢目会館に移し、会費制で行なうことが多くなった。この場合でも宿の順は定められており、宿の家は祝いの準備を担当する世話人のような役になっている。

ナワナイ仲間が集まって縄をなう作業は現在には全く行なわれていない。かつては「足ぶみ」で縄をなっていたが、戦争前後から縄ない機械が使われ始めた。機械でなった縄は手縄より使いにくい面があったが、量的にはたくさんの縄を作ることができたので、縄ない機械は徐々に普及した。昭和27年のF70の「葺替・付御手伝物受帳」にも、機械縄を持参した例が散見できる。縄ない機械を買った家では、仲間の家でのナワナイには従来通り参加するが、自分の家でのナワナイに来てもらう必要がなくなり、機械を購入する家が増えるにつれて、ナワナイに集まる機会が少なくなっていく。前述したように、昭和30年代からカヤ屋根をトタン屋根に替える風が広まり、縄を提供したり、受ける機会もいよいよ少なくなった。最も早く、共同のナワナイがなくなったのは20年ほど前のことで、下の久田・石合・畑中のナワナイ仲間である。その後は自分の家で縄をなっていたが、10年ほど前からは、必要なだけの縄を買うようにさえなっている。

共同のナワナイや屋根替えの手伝いという実質的な作業が行なわれなくなった現在でも大部分のナワナイ講の構成は維持され、講員の親睦を主な目的として、カサコシだけは行なわれている。地縁的紐帯によって結ばれた集団の分解を抑制するために、ナワナイ講は大きな役割を担っていると考えることができる。ナワナイ講と全く同じ範囲に構成されていたサナブリ祝いのグループにも同様の経過を見ることができる。田植のユイやマッコのツメ切り、街道こさえなどが全く行

なわれなくなっている現在も、サナブリ祝いの慣習は維持されているのである。カサコシやサナブリ祝いなどの娯乐的、儀礼的部分に比重を移しながらも、仲間の単位は変更されることなく維持されている。これらの民俗事象を支える集団の単位が、隣接するサワ間の協同の範囲であり、いいかえれば地理的に近接するだけでなく、同族祭祀さえも共同で行なうことができるほど心理的に近接しているエドウシマケ間の協力関係なのである。

## 6. おわりに

同族団に関する機能についての竹内利美の発言にあるように、「従来の研究方法、たとえば、一方では家系によるグループを検出し、他方では本家分家間の一般慣行を聴取調査して、両者を安易にむすびつけるといった行き方<sup>11)</sup>」は、反省されなければならない。民俗慣行を捉える時に、それを担う集団や環境を所与のものとして安易に取り扱うことはできない。民俗の変化を捉えようとする時に、事象自身の変化や消滅のみを取り上げるのではなく、その事象を担っている集団の変化と関連して捉える視点が必要になる。本稿では十全とはいえないが、民俗慣行の変化を、それを担っている集団（サワ間の協力関係のグループ、エドウシマケ間の協力関係のグループなど）との関係で整理してみた。近い将来に上梓されるはずの「東沢目民俗誌」においては、これらの点にも十分な配慮がなされるはずである。

〔付記〕 本稿の資料は前述したような経緯から、伝承文化研究会（松田精一郎、鈴木通大、岩崎真幸、恵津森智行、山本）の共同調査によって得られたものである。また本稿は1980年10月に金沢市において開かれた第32回日本民俗学会年会で発表した要旨に加筆訂正したものである。執筆にあたって示唆をいただいた共同調査者各位に謝意を表し、同時に長期間にわたって快く資料を提供していただいた調査地の各位に謝すとともに、あわせて、いま少しの時間を乞うておきたい。



< 註 >

- 1) 岩崎真幸・鈴木通大・松田精一郎・山本質素「<民俗誌>の系譜」『日本民俗学』113号、1977年9月。
- 2) 成城大学民俗学研究所「岩手県江刺市梁川町 大幡 西沢目 水岳 長京 久田地区 民俗調査報告」『伝承文化』第9号、1975年3月。
- 3) 山口弥一郎・和田文夫「陸中膽澤の散村聞書」『社会経済史学』11-1、1941年4月、P.96。
- 4) 山口弥一郎「陸中膽澤扇状地に於ける散居と其の生活」『地理学評論』17-5、1941年5月、P.339。
- 5) 及川宏「分家と耕地の分与—旧仙台領増沢村における耕地均分の慣行に就て」『民俗学年報』第1巻、1938年12月(同「同族組織と村落生活」未来社、1967年3月)。同「同族組織と婚姻及び葬送の儀礼—旧仙台領増沢村に於ける慣行に就て」『民族学年報』第2巻、1940年12月(同上)。
- 6) 末成道男「岩手県江刺地方の同族」原忠彦・末成道男・清水昭俊『仲間』弘文堂、1979年1月。キース・ブラウン、末成道男「分家の分出について—岩手県水沢市近郊農村の事例より—」『民族学研究』31-1、1966年6月。札幌大学社会学演習『岩手県江刺市深川 実態報告書—家族と村落の構造とその変容』1971年3月。築島謙三「姉体村・後山部落の調査報告」『文化心理学基礎論』頸草書房、1962年12月。
- 7) 岩手県江刺郡野手崎尋常高等小学校・江刺郡梁川村立梁川青年学校編『岩手県江刺郡梁川村郷土教育資料 全』、1940年7月。菊池亀覚編『知るは愛の初め 時代を語る梁川村年表』江刺郡梁川村役場、1953年。
- 8) 東沢目と西沢目の小学1年生から4年生までが通学していた大内田分教場が、野手崎小学校本校に統合された時、分教場の校舎の払い下げを受けて現在地に移築し、梁川公民館東沢目分館とした。20年余年前のことである。その後、経営主体が公民館から東沢目に移り、東沢目会館となった。
- 9) 東沢目のオボツナに関する報告・考察は、共同調査者の一人である岩崎が、家の神としての地の神祭祀から、旧梁川村村社たる松尾神社の祭祀までの重層的な信仰生活の実態の中で取り上げているので、これを参照のこと。岩崎

真幸「東沢目の信仰生活とオボツナの協力関係―岩手県江刺市梁川町東沢目の民俗―」『東北文化研究所紀要』12、東北学院大学、1981年。

- 10) 屋根を葺く職人のことを「オケ」といい、棟梁は「オケガシラ」とよぶ。梁川内には集落別に「オケ仲間」が構成されている。大正14年2月に創立された「梁川葺細工連合組合」記録によれば、当時は大久保組、中田組、東沢目組、西沢目組の四つのオケ仲間が既に活動中であり、最盛時には八つの集落にオケ仲間があった。東沢目のオケ仲間は昭和18年度には上のすべての家と、下の4人、大窪の2人、計60人が参加していた。現在も活動中の仲間は、東沢目と西沢目の二つのみとなっている。東沢目のオケ仲間は腕が良いと評判で、頼まれれば北上市近辺まで、農閑期に数人ずつ出かけてゆく。
- 11) 竹内利美「近隣関係と家―東北村落の一事例を通じて―」喜多野清一・岡田謙編『家―その構造分析』創文社、1959年6月、P.125。

図1 東沢目の人口構成

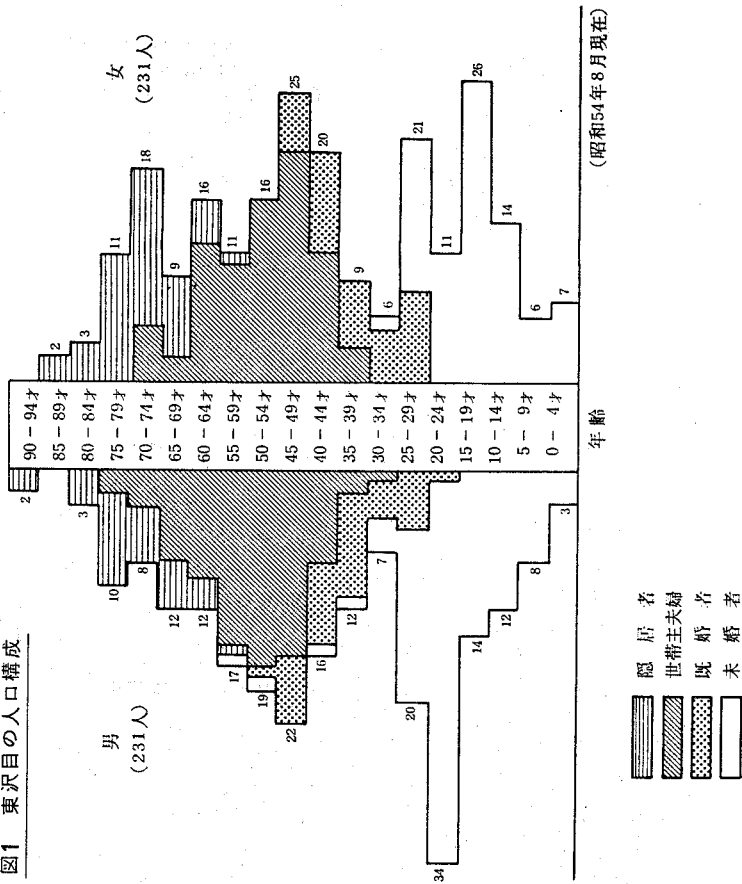



図 2 東沢目の集落

- x-x-x- 5区と6区の境界  
 ----- 字の境界  
 サワの区分： < > サワ名  
 日 オボッナ ： ( ) 神社名  
 (会) 東沢目会館  
 ↓ バス停  
 ----- 道路  
 ~~~~~ 川

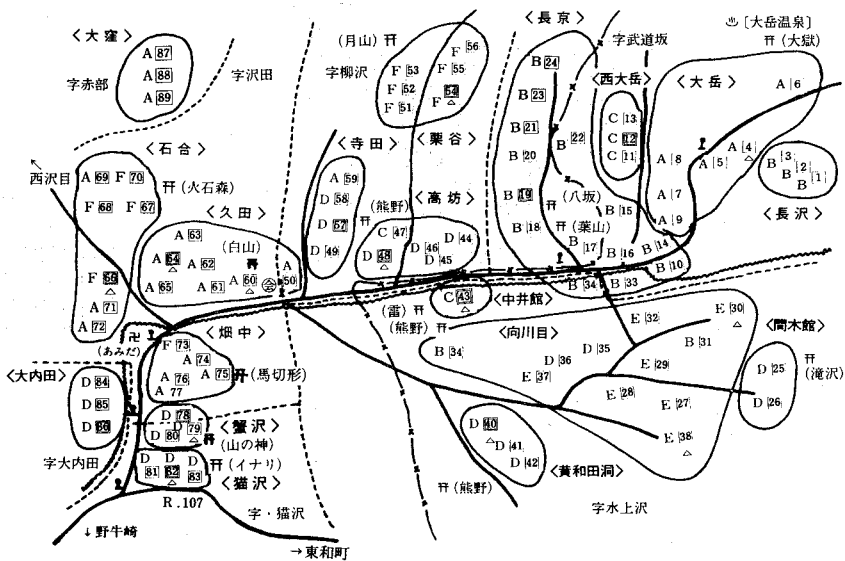


表 1 サワとエドウシマケとオボツナ

( )内は戸数, 昭和 54年 8月現在

| サワ名      | 主体となるエドウシマケ                                   | 本家         | 他のサワからの分家                   | 主体となるエドウシマケのオボツナ        | 別当           |
|----------|-----------------------------------------------|------------|-----------------------------|-------------------------|--------------|
| 長 沢 (3)  |                                               |            | 長京の阿部から (3)                 | (長京の葉山神社)               |              |
| 大 岳 (6)  | 今 野 (6)                                       | 他出         |                             | 大 獄 神 社                 | A 4          |
| 西大岳 (3)  | 菅 原 (3)                                       | C 12       |                             | (長京の葉山神社)               |              |
| 長 京 (4)  | 阿 部 (4)<br>阿 部 (4)                            | B 19<br>他出 |                             | 葉 山 神 社                 | E 30         |
| 向川目 (1)  | 安部 (山田, 上野, 阿部)<br>菊池 (菊池, 千田, 安部) (8)<br>(2) | 他出<br>不明   | 長京の阿部から (1)                 | 熊 野 神 社<br>滝 沢 稲 荷      | E 38<br>D 36 |
| 間木館 (2)  |                                               |            | 向小目の菊池から (2)                | (向川目の滝沢稲荷)              |              |
| 黄和田洞 (3) | 菊 池 (3)                                       | D 40       |                             | 熊 野 神 社                 | D 40         |
| 中井館 (1)  | 菅 原 (1)                                       | C 43       |                             | 雷 神 社                   | C 43         |
| 高 坊 (5)  | 菊 池 (4)                                       | D 48       | 中井館の菅原から (1)                | 熊 野 神 社                 | D 48         |
| 栗 谷 (6)  | 佐々木 (6)                                       | F 54       |                             | 月 山 神 社                 | F 54         |
| 大 窪 (3)  | 今 野 (3)                                       | A 87       |                             | (栗谷の月山神社)               |              |
| 寺 田 (4)  | 菊 池 (3)                                       | D 57       | 久田の今野から (1)                 | 白 山 神 社                 | A 60         |
| 久 田 (7)  | 今 野 (7)                                       | A 64       |                             | 駒 形 神 社                 | A 64         |
| 石 合 (7)  | 佐々木 (4)                                       | F 66       | 久田の今野から (3)                 | 火 石 森 神 社               | F 66         |
| 畑 中 (5)  |                                               |            | 久田の今野から (4)<br>石合の佐々木から (1) | (久田の駒形神社)<br>(石合の火石森神社) |              |
| 蟹 沢 (3)  | 菊 池 (3)                                       | D 78       |                             | 山 の 神 神 社               | D 79         |
| 猫 沢 (3)  | 菊 池 (1)                                       | D 82       | 寺田の菊池から (1)<br>他 (1)        | 稲 荷 神 社                 | D 82         |
| 大内田 (3)  | 菊 池 (3)                                       | D 86       |                             |                         |              |
| 計 (89)   | (71)                                          | -          | (18)                        |                         | -            |